



平凡社

中国現代文学選集 11 長編小説Ⅱ

林海雪原 下

樹海と雪の原野に

曲波 飯塚 朗訳

付 解放戦争のころの林彪同志 周亦萍 伊藤敬一訳

の杜甫

馮至 山之内正彦訳

中国現代文学選集  
全20巻

林海雪原(下)

第7回配本・第11巻

昭和37年8月7日 発行 ©

定価 450 円

訳者との申合  
せにより校印  
を省略します

訳者代表 <sup>い</sup>飯 <sup>つか</sup>塚 <sup>あきら</sup>朗

東京都千代田区四番町4番地  
発行者 下中邦彦

東京都板橋区志村町1丁目1番地  
印刷者 川上 胖

凡社

株式会社  
製本所

目次

林海雪原 下

二二	徹夜で治療する白い小鳩……………	三
二三	雪の中に萌える恋……………	一七
二四	樊超家の急報……………	三三
二五	敵の計略の裏をかく……………	五二
二六	老道僧を捕える……………	七〇
二七	絶壁を跳ぶ青年獵師……………	八九
二八	刺客と反逆者……………	一一三

二九	虎を山からおびき出す……………	一三
三〇	巢窟焼いて、尻を切る……………	一六
三一	飼葉桶で、馬を爆破……………	一八
三二	樹海と雪の原野の大旋回……………	一九
三三	救助解放……………	二〇
三四	チミール草原……………	二六
三五	「雪の上の勇者」……………	二四
三六	四方台の不思議を語るにんじん老人……………	二六
三七	李鯉宮前の決戦……………	二八
三八	鉄の流れ……………	三〇

東北解放戦争のころの林彪同志……………三〇五

潭州たんとしゅうの杜甫……………三一九

解 説……………三五二

林  
海  
雪  
原  
下



## 二二 徹夜で治療する白い小鳩

みんながちょうど、年を越し、新春を迎える食事の最中、外から捕虜を監視していた戦士が一人はいつてきて、剣波ケンバらの食卓のそばへいつて低い声で報告した。

「二〇三隊長に報告、負傷した捕虜の一人が、傷口をまだ包帯していません、ずっと出血がとまりません。もう一度薬をつけてくれと哀願しています。それで……」

と戦士はためらつて、なにかいいかげんな様子だが、どうもいい出しにくいらしい。しかし彼はついにこういつた。

「あの匪賊どもは憎むべきですが、もう銃もとり上げたんだし、わたしの考えでは……」

「いいわ！ あたしがすぐいきます！」

白茹バイロがさっそく碗をおいて、腰かけのところへ薬囊をとり

にいつた。

「白鳩ちゃん！」

劉勲リウクン蒼センアツが白茹に声をかけて、

「さっさと食べろよ！ そんなやつにかまうな。どうなつてもいいよ。一人死ねばそれだけ人数が減る」

白茹は劉勲蒼にむかつて口をとがらせ、

「このタンクつたら、殺すことしか知らなくて、政策という考えなんかないのね」

「政策、政策くらい知つてるよ！ 政策を考えていなけりゃあ、おれはとつくにやつをかたづけてる！ 匪賊に対してはな、政策はそんな機械的にやらないで、なりゆきにまかせなんだ！ あわれむね、う、なんかないよ」

「彼らはもう武器をすてたのよ。負傷した捕虜に対しては、あたしたちは忠実に、党の政策を実行すべきよ。そしてあたしたち共産党の、りっぱな革命的人道主義をもつべきよ」

白茹はそういつて、きびすをかえて威虎ヒコ庁チョウを出ていつた。

劉勲蒼はむつとして自分の席をはなれ、白茹をひきとめに歩いていこうとした。

劍波はそれを制止して、

「劉勳舊同志！ 事をあらだててはいかんよ！ 白茹は正しい、あの戦士の言葉も正しい。彼女をいかしてやりたまえ！」

劉勳舊は隊長がそういうのをきいて、いくらか困った様子で自分の席へもどった。みんなが彼を見て笑っているの、いそいで劍波の視線を避け、口をまげてしかめ面をしてみせながら腰をおろした。

楊子榮ヤンシロンはみんながさかんに食べているなかで、各小隊の宿営地をしらせた。彼はユーモアたっぷり、

「同志たち！ 現在われわれは『威虎山の王』というわけだ！ 二〇三隊長は当然『山の大王』、『とりでの主』、おれはやっぱり演じてきた役柄で——『副官』だ。むろん山の各地点の名称は、山窩の鷲のときからの呼び名のとおりで、改名するにもあたるまい。相かわらず、東西南北の寨ちやいだ。第一小隊は東北の寨、第二小隊は東南の寨、第三小隊は西南の寨、李勇奇リユウキ小隊は西北の寨にそれぞれ駐屯。二〇三隊長はもちろん威虎庁のわき部屋、山窩の鷲のいたところす。泊ったらみんな十分ねむること、元気であすの元旦をむかえられるようにな」

楊子榮がそんなにユーモラスに話したのに、戦士たちはちよつと苦笑しただけだった。

劍波はこの異常な雰囲気、心中おどろいて、

「どうしたことだろう？」

と思ったが、すぐに、戦士たちは疲れすぎている、いままでもう二日二晩一睡もしなかったのだ、と思いついた。そのうえ樹海と雪の原野を五十里も歩いて、満足な食事もしていなかったのだ。彼はそう考えると、即座に命令した。

「同志諸君！ みんな疲れている、はやくたべてはやく休もう！」

彼がそういうおわって、見ると、疲労が極度に達したか孫達得ソンダクトが眉をしかめ、歯をくいしばって、手で卓のふちをおさえ、足をひきずりながら移動している。その歯をくいしばって、なにか苦痛とけんめいに戦っている様子がよくわかる。その苦痛ももう極点に達しているようだ。数年来経験してきた苦しい環境で、孫達得のこんなすがたを、劍波ははじめて見た。この頑強な戦士は、ふだんから苦痛と戦う特殊な力をもっていて、彼の忍耐力はだれも及ぶところではなかった。あるときなど、偵察任務についているとき、太腿またもとに重傷を負

ったが、任務をはたすため、太腿をタオルでしばっただけで、夜どおし頑張り、這ったり、棒を杖にして、とびはねてもどって情況報告をしたこともある。そのときも彼の表情は、平然としていた。だのに今日は、こんなに苦しんでいるのは、なぜか？

「どうした？ 達得同志！」

剣波は近よって彼の肩をささえてきいた。

「なんでもありません！ 二〇三隊長！」

彼はむりに疲れた眼をみはり、口もとにかすかな苦笑いをうかべて、

「足がすこし痛むだけで！」

剣波はハッと思いあたるのだった。こんどの戦闘で、孫達得ほど苦しんだものはなかったのだ。彼は六日六晩、たった一人で連絡に走り、往復百里の樹海と雪の原野に、一頭の馬さえなく徒歩をつづけた。もどつても、あたたかい一杯の飯さえ食わず、すぐにまた分遣隊とともにひっかえし、長途の奇襲行軍に参加したのだ。たとえ鉄や石でできた人間だつて、しんじく侵蝕、風化をうけるだろう！ こんなに頑強で、鋼鉄のような意志をもった戦士が、普通の苦痛で、これほど痛め

つけられるはずがない。この様子では、苦痛はもう彼の忍耐力をこえている。剣波がそう思ったとき、突然自分の両足、とくに足の指と踵とが、はげしく痛んでいるのを感じた。

「緊張した戦闘の最中、勝利の興奮のあいだは、こうした痛みに気づかないものだ。いまや戦闘はおわり、みんなの興奮がおちついてきて、屋内のぬくもりが、こごえてしびれていたした。肢体をほぐし出すと、痛みが襲ってくるのだ」

と気がついて、思わず声に出した。

「疲れきってしまったんだ！ 冷えきってしまったんだ！ 折り返した行軍中は、全部騎馬だったんで、おそらく足が凍傷をおこしている。はやく、達得同志、横になれ！」

そういって剣波は楊子栄と、彼をたすけて、熊の皮の敷物の上にねかせた。孫達得は横になるとすく、もううつらうつらと寝入ってしまった様子、ただのどから、低く苦しそうなうめき声を発していた。

「はやく靴をぬがせて、はかせ脚絆をとってやれ」

楊子栄が脚絆をとってやったとき、孫達得の二本の長い足をさわると、氷のようにつめたかった。靴をぬがそうとする、そのウーラー靴はもうぬげなくなっていた。みんなあわ

ててうろろうしている、李勇奇が突然みんなをかきわけて前へ出て、

「はやく、七首あぐらでウーラー靴の紐を切り、まず靴の上皮をむしりとるんです」

李勇奇にそう注意されて、楊子榮はさっそく脚絆の間から自分の七首をひきぬき、スッ！ スッ！ スッ！ とつづけて二十回も切れ目をいれ、ウーラー靴の紐を全部切断、サツとばかり靴の上皮をはぎとり、それから四本の指をつつこんで、ウーラー靴のへりを外へひらき、やっと靴をぬがした。見ると孫達得の両足はすっかり腫れあがり、ところどころ、指先まで、紫色に変色、踵かかとも数カ所、裂けて口をあけ、血がしたり、見るもゾツとするありさま。

劍波はそれを見て、あわてて「白茹」と叫んだ。

「白茹は捕虜の薬をぬりにいって、まだかえりません」

と李鴻義リーホンギが答える。

「どうしたらいい？」

劉勳蒼もじりじりして、

「いそいで火にあぶろう！ おれが薪をさがしてくる」

そういいながら、外へむかってかけ出し、戸口でまたふり

かえると、楊子榮に、

「楊さん、あなたはやくお湯をわかしてくれ。たくさんわかつて、まず孫達得をあたたため、それからみんなにもあつたまってもらおう！ おれの足も痛くなってきた」

楊子榮はすぐ身近にいた二人の戦士に、湯をわかすように命じたが、歩き出すと、その二人の戦士も、顔に痛そうな表情をうかべて、びっこをひいていた。

李勇奇が楊子榮の腕をひっぱって、

「同志たちの足はみんな凍傷にかかっていますよ！ わしら民兵の足は、この土地に生れ育ったんだから、馴れていて大丈夫だがね。凍傷ってやつは、お湯であたためても、火にあぶってもだめだ。やっぱり白茹をさがしてからにした方がいいと思いますよ」

そういって出かけようとしたところへ、出会頭であいがしらに白茹が、満身雪だらけでもどつてきた。

「どうしたの？」

白茹は李勇奇のあわてた様子をみて、ふしぎそうにきく。

「あなたをさがしにくところさ」

白茹は戸口をはいって、いそいでたずねる。

「どうしたっていうの？」

「凍傷で足をやられたんです！」

戦士たちがあちこちから小声で答える。

白茹は手をふって、

「みんなはやくウーラー靴をぬいでよ！」

そういいながら、栗囊をすばやく卓上にひろげて、

「はい方がいいわ。はやくぬいで！ みんな動かずに、こ

こでいっしょに治療しますす！」

「そうだ！ そうしなきゃあ！」

剣波もゆう、う、う、そうに眉をしかめて、一と言つけ加えた。

みんな命令どおり、いっせいに熊の皮の敷物の上に坐り、

自分のウーラー靴をぬいだ。

白茹は大いそぎで孫達得の足もとに坐って、彼の凍傷をしらべた。

ちょうどそのとき、劉勲蒼が一たばの薪を抱えてはいって

きて、ボンと地上に投げ出し、それから野猪の油をその上に

ぶっかけて、火をつけると大声で、

「ウーラー靴をぬいだものは、はやく火にあたりにこい！」

白茹はそれをきくといきなりふりむき、あわてて叫んだ。

「なにをするの！ タンク？」

「足をあぶるんだ、それがなんだ！」

「まあ！ あんたはみんなの足を切りおとすつもりなの！」

白茹は怒って彼をにらみつけ、

「だれも火にあたつちゃあいけません！ いまはあつためる

んじやあなくて、冷やすのよ。はやく外へいって雪をもって

きてよ！」

李勇奇のこの山林さんりん通は、白茹の治療法を心えていて、すば

やく山窩さんごの驚の卓から抽き出しをはずすと、外へかけ出して

いった。

このとき戦士たちももうウーラー靴をぬぎおわって、自分

の足を抱えながら、かすかなうめき声を発していた。

剣波と白茹は戦士たち一人一人の足をしらべて見て、軽重

の度こそちがえ、すべてが凍傷にかかっていると知ったと

き、剣波の心は焦燥にかられ、深い憂愁にとざされた。

「作戦のことなら、あらゆる知恵をしぼって、死傷をすくな

く、勝利をかくとくすることはできるが、この極寒ごくかんの凍傷と

いう悪魔に対しては、自分も手がでない。戦闘はなお継続し

ていかなければならないが、もし迅速に治療をおこない、ま

た有効な予防措置をとらないと、非戦闘員をたくさんつくり出すことになる。そのために、わが遊撃分遣隊の戦闘力をめちゃめちゃにしてしまうこともあるかもしれない。そんなことで、党の任務がどうして果たせよう？」

白茹はこの情景をみて、自責の念にかられた。なぜなら、高波の犠牲が彼女を悲しませて、なにもかも忘れてしまい、こんどの戦闘もきわめて火急に行動を起したので、一分間のひまさえなかったからだ。そのため、出発前に、きのこ老人のところまで学んだ凍傷予防の秘法で、同志たちに効き目の強い膏薬を塗ってやるのが間に合わず、今日のようなありきたりの凍傷を起させてしまったのである。凍傷の程度をみると、ほとんどがそうひどくはなくて、ごく短い時間で治せる自信はあったが、同志たちの苦痛を招いてしまった。彼女はすまなそうな眼つきで、心配している剣波をながめたり、同志たちの方をながめたりしていた。

李勇奇が抽き出しっぱいに雪をいれてはいつてきて、白茹の前へおく。白茹は両手で雪をすくいあげると、孫達得の足のところへもって行って、こすりはじめた。彼女は敏捷な小さな手で、孫達得の腿から足へ、往復摩擦をしながら、

戦士たちにむかっていった。

「みんな、はやく雪で、あたしのこのやりかたのとおり、こすってちょうだい」

劉勲蒼がおどろいたように、

「白鳩ちゃん！ きみはどここの国のお医者さんだ？ そんなふうになをあつかって！ 凍えたうえにまだ雪をくつつけるのか？ 世の中にそんな治療法があるかい？ これじゃあまるで、のどがかわくほど塩を食わせ、暑いほど綿でくるむようなものだ。きみは『廟におまいりにいく』んじやなくて、『道僧』をやっつけようっていう魂胆なんだな」

戦士たちも、そんなことをしたくないと思っていたところへ、劉勲蒼のこの皮肉たっぶりな質問を耳にしたので、みんなにらむように白茹を見つめて、手をくだしかねている恰好。一人も雪でこすろうとするものはなかった。

李勇奇が、白茹が口をひらくまえに、横合いから、

「同志たち！ 白茹さんのやりかたはほんとうだ。いまは火にあたっても、湯であたためてもいけない。雪でこすることが肝心だ。わしらが凍った梨を食うのと同じで、買ってきたら、つめたい水にいれると、凍ったのがとけてくる。凍った

梨を湯に入れたら、きまってグシャグシャになっちまいますよ。また、いくにちも食わずに飢えた人間みたいなもんで、はじめ一、二回、けっして腹いっぱい食っちゃあなんねえ。腹いっぱい食ったら、腹がふくれて死んじまいます。みんな、白茹さんのやりかたで、まちげえありませんよ。この点、この李にも経験がありますよ」

何人かの民兵もしきりに、

「そのとおり！ そうしなきゃあいけない」

といった。

剣波もそれをきいて、それも道理と考えたので、戦士たちにもわかって説明した。

「李勇奇のいうことはもつともで、人間の組織も、他の物質と同様、一時に冷たかったり熱かったりしては、たえられるもんじゃあない。たとえばガラス瓶を非常な低温の場所において、すぐこの瓶の中へ熱湯をそそげば、瓶はいっぺんにわれてしまう。また、凍った野菜をいきなり、熱い部屋へいれたら、すぐグニャグニャになるだろう。まず、あまりあたたかくない場所においてから、だんだんあたたためていくのがいいんだ。反対に、まっかに焼けた鍋に、突然冷水をそそげば、

その鍋は割れてしまう。くわしい科学的原理は、あとできみたちに話すから、みんなはやく手でこするんだ！」

戦士たちは、李勇奇の話をきき、また剣波のあげたとえ話も耳にして、みんな李勇奇というこの雪の中にながく住んでいる人間の経験を信じ、さらに信頼をよせている彼らの隊長の話もあったので、さっそく雪で足をこすりはじめた。戦士たちは雪に触れてみると、しきりにさわぎ出して、

「ふしぎだなあ！ どうして威虎山の雪はつめたくないんだ？」

「おれはいくらか熱く感じるぞ！」

白茹は首をか上げて笑いながら、

「これは雪がつめたくないんじゃあないの、あんたがたの足が雪とおんなじにつめたいのよ」

彼女は孫達得の足をこすって、自分の手のひらと同じくらいの温度になったとき、はじめてホッと息をついて起きあがり、薬囊から、大きな薬の袋をとり出し、楊子榮にわたして、

「いそいでこの薬を鍋に入れて、桶か三びばいの水で煮て、熱くしてちょうだい」

そういいながら、話題を転じ、

「この李おじさんがよく知ってるわ！ あなた、民兵の同志何人かつれていってちょうだい！」

楊子榮らは厨房にむかって走った。

このとき孫連得はもううなり声をたてなくなつて、スースー熟睡していた。白茹は彼の足にアルコールを塗り、またひとしきり摩擦して、軍用外套を何枚もかけてやり、それから向きなおつて、戦士たちの足のあたたか味が、どのくらい回復したかを手でさわつてしらべた。すこしひどいなと思われ、戦士があると、そこへ坐りこみ、凍った足をふところに入れてしばらくこすつた。戦士たちの足は彼女のふところに入られて、綿の上におかれたような、あたたかさやわらかさを感じた。

劉勳蒼がこすりながら、たまらなくなつたように、

「白鳩ちゃん！ いつまでこすればいいんだ！ いったいキリがあるのかい？」

白茹が笑つて、

「もうすこしがまんするのよ。タンク！ あたしの手と同じあたたかさになつたらいいわ。もうすこししたら、あたしが

みてあげる」

劉勳蒼はフンといつて、フウツと太い息をつき、

「よからう！ いまはきみのいうことをきかなきゃあならん」

「そうよ！ スキー練習では、あんたのいうこときいたわ。

いまはあたしのいうときかないとだめよ」

「オウ！ 白鳩ちゃん！ おれに仕返しをしようと思つてんだな！」

「エエ！ 仕返しなら、仕返しでいいわ！」

白茹は毅然たる態度で、そういいながら劉勳蒼の前にいき、わざと命令するような口ぶりで、

「足をだしなさい！」

劉勳蒼がひっこめようとした足は、白茹の手につかまれてしまった。

「タンク！ あんたここでサボタージュをしてたわね。あんたの足の温度はちつともあがってないわ！」

「つめたい雪でこすらせて、どうして温度があがるんだ？

これじゃあまったく、天津の漫才師だよ『アイスクャンデーを食つて、人を焼き殺します』ってな」

「そんなデタラメな議論はやめて！ みんなほかの同志たちは、どんなことをしても温度を上げようとしてこすってるじゃないの！」

白茹がそういいながら、彼の足をつかんで、しばらくはげしくこすった。劉勳蒼は笑って、

「白鳩ちゃん！ きみはほんとうに仕返ししようと思ってるんだな？」

白茹は彼をおしやり、

「あんた、考えかた、もののいいかたを、すこし改めたらどうう」

「へえ！ どういう考えかた、どういういいかたなんだ？」

劉勳蒼がそう反問する。

「仕返しっていうことよ！」

「どう改めるんだ？」

「お札というべきよ！」

「おやおや！ 娘さん！ きみのそんなお札など受けようとは思わない。きみになんの恩もかけないもの！」

白茹は笑って、

「もしスキーを習うとき、あたしも習わない、みんなも習わ

ないっていったら、あんたあたしたちにむかってどうする？」

「なんとしても、きみらに習わせなきゃあならないよ！ お

ぼえなかつたら、練兵場で教練をやらせるよ」

「なぜなの？」

「いうまでもないだろ？ 作戦のためさ！ きみが落伍したため、きみが樹海や雪の原野に埋まってしまうないためさ」

白茹はうなずいて、

「それがわかっているんならいいわ！ 今日のあたしも、作戦のためよ。あんたが落伍しないため、樹海や雪の原野に埋まってしまうないためよ」

白茹は劉勳蒼の足がもう正常の温度に回復したのを見て、

笑ってふりかえり、薬囊からアルコールの瓶を出して、綿をアルコールにひたし、彼の足に塗布してから、しばらく手でこすった。そのあとで身を起し、劉勳蒼の足がもう紫色から、赤みを帯びてきたのをみつめながら、微笑してつぶやく。

「よかったわ。なおりかたが早いほうよ！」